



教育コラム

教育長に聞く



第19回 胎内市教育長に聞く

「ふるさと体験学習」で探求心と豊かな心をはぐくむ

2010年05月11日公開



小野 達也 [胎内市教育長]

[おの たつや]

1959年、新潟県生まれ。東海大学文学部広報学科卒業。
82年、旧・中条町入庁。新潟県庁、学校法人・太平洋(南イリノイ大学新潟校)へ派遣。初代東京事務所長、職員労働組合連合会執行委員長。中条町・黒川村合併協議会事務局班長を務め、2005年9月に合併後の胎内市では総務課法制係長、総務課参事を歴任。07年3月より現職。

* 趣味 / 鉄道旅行

* 座右の銘 / 「なせば成る！」

💡 多彩な教育資源を活用

体験学習施設が充実していることに驚かされました。

自然科学施設として、胎内昆虫の家、胎内自然天文館、クレーストーン博士の館など、歴史施設として、シンクルトン記念公園、黒川郷土文化伝習館などがあります。ほかに、胎内彫刻美術館、茶室や調理施設、ヤギの搾乳体験ができる施設、市営の水力発電所の電気を使った、ナイター設備のある野球場やテニスコートなどのスポーツ施設……。多種多様な施設が市内にあります。

各施設には、専門のスタッフが常駐して、見学者や利用者へのきめ細かな対応をしています。「胎内昆虫の家」のスタッフは、学校での昆虫の授業の講師としても活躍し、近隣の市で行われている教員研修会の講師なども務めています。また、「胎内自然天文館」を活用することで、昨年の皆既日食に合わせた学習にもしっかり対応できました。

学校教育では、教科書等の内容をしっかり学習し、理解することが基本ですが、これらの施設を活用することで、本などから得た知識を実際に体験することができます。本物を見て、それに直接触れると、いままで見えていなかったものに気づくようになり、昆虫をさらに調べたいとか、星についてもっと知りたいというような興味、関心がわいてきます。そして、自分で調べることでさらに探求心が強くなり、学習意欲が高まります。これは、子どもたちの「自信」を育てる教育にもつながるのではないかと、私は思っています。

胎内市には、このような体験学習施設だけでなく、海あり、山あり、川ありの豊かで変化に富んだ自然があります。市内を流れる胎内川を中心に、上流部には美しい渓谷が見られ、中流部の扇状地には肥沃な農地が、海岸線には砂丘と松林が広がっています。

そこで本市では、平成20年度より、充実した教育資源を活かして、市内小学校の児童を対象とした体験学習を実施しています。その根底には、子どもたちを「地域でしっかり育てる」という考え方があります。いわゆる「ふるさと教育」ですね。ふるさとに学び、ふるさとを学び、ふるさとに活かす。そして、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りを持つ。学校と地域

とが密接に連携して、そういう子どもを育てたい。それが、私たちが取り組んでいる「胎入市ふるさと体験学習」です。

田植えや稲刈り、チューリップ栽培、やわ肌ネギ収穫などの「農業体験」、枝打ちなどの「林業体験」、地引網漁などの「漁業体験」、和牛のブラッシングやヤギの搾乳などの「畜産・酪農体験」、ブナ林トレッキングやバードウォッチング、星空観察、昆虫観察、鉱物観察などの「自然・環境体験」、米粉クッキングや笹団子づくりなどの「食の体験」、カヌーやスキーなどの「スポーツ体験」……。地域の特色を活かした、いろいろな体験プログラムがあります。

なかでも、「農家民泊体験(農泊)」は、本市の体験学習の重要なプログラムです。子どもたちは農家に宿泊しながら、農作業や料理などの体験をします。宿泊人数は1軒に約4人。農泊のいちばんの魅力は、やはり受け入れ先での人と人との心温まる交流です。子どもたちに感想を聞くと、「とても優しくしてくれて、いろいろな話ができた」「一緒に野菜を収穫したり、夕食をつくって楽しかった」など、たいへん印象深い体験だったことがわかります。実際に、別れのシーンでは、涙ながらに感謝の気持ちを伝えている子どもの姿がよく見られます。

農泊は、いわば「家庭・学校からの旅立ち」ともいえる体験で、他人とのコミュニケーション能力や温もりのある人間づきあいを学ぶ場としても、貴重な学習体験です。また、受け入れる大人たちにとっても、子どもたちの笑顔から元気をもらうことで、体験学習の質をもっと高めようという意欲がわいてきます。これは、生涯学習につながるのではないかと私は思っています。

「ふるさと体験学習」は、もともとは市内の子どもたちのために実施したのですが、現在は、近隣や都市部の学校などにも活用していただけるような体制づくりをしています。市営の宿泊施設も4棟あるので、学習の場だけでなく、運動部の合宿施設などにも利用できます。

地域が支える学校教育

先生の多忙感がいわれっていますが、どのような対策が行われていますか。

学校教育の一部を地域の方々に担っていただくと考え、地域の組織づくりを進めています。先生方の多忙感の軽減にも役立つのではないかと考えています。

いま実施しているものとしては、小学校や公民館などを利用した「放課後子ども教室」があります。小学校児童の放課後の居場所づくりと、地域住民との交流を目的として、平成20年度から開始したものです。現在は40人あまりがボランティアとして登録し、毎回10人ほどが教室に参加して、子どもたちと一緒に活動しています。まだ、市内の2つの小学校区をモデル地区として始めたばかりですが、将来的には全小学校区に教室ができることを目標としています。

また「学校支援ボランティア」の導入も、少しずつ進んでいます。ボランティアに登録した地域の方々に、環境整備や図書整備、課外活動のサポート、登下校の送迎など、教育活動のさまざまな場面でご協力いただいています。これも、将来的には全市的な取り組みにしたいと思っています。

そして、現在行っている「学校評価システム」。これは、平成18、19年度に、文科省からの委託事業として始めたのですが、当時の現場の先生方は、評価シートづくりなどシステムをつくり上げるのに大変な苦労をされたそうです。でも、出来上がった評価シートを保護者や地域の方々に公開することで、学校の敷居が低くなり、地域の方々の学校への行き来を容易にするという効果もありました。現在、各学校では、地域住民のなかから「学校関係者評議委員」を選出し、学校評価をしていただいています。同時に、その評価を学校教育に活かしていく取り組みのサポート役もお願いしています。

モンスターペアレントの問題なども、学校だけで抱えてしまうと、教師の負担感が増すば

かりです。そうではなく、地域のサポート組織に積極的に相談して、みんなで問題を共有し合う。そして、みんなで解決への道を探すべきだと私は思います。

子どもの可能性を伸ばせる環境を

特別支援教育については、どのような取り組みをされていますか。

平成17年度より「胎内市教育相談体系化連携事業」を始めています。就学前から就学、就労までを体系化し、教育、就労、地域など各分野の関係者が連携して、子どもたちの健やかな成長のためのサポートをしていくシステムです。構成員は、学校、保健、福祉、医療関係者、民生委員などのほかに、知的障害者を持つ親たちが中心となって結成した「胎内市手をつなぐ育成会」のメンバー、不登校児童の適応指導教室「さわやかルーム」の指導員などです。

保護者からの相談依頼を各小中学校や幼稚園、保育園が受けると、各学校の「校内委員会」が、専門家や医療機関などと連携して対応を検討します。たとえば、幼児の就学指導をする場合でも、生活面や学習面で気になる子どもが保育園にいた場合、就学後の指導方針を検討します。時には、特別支援学級などを勤めることもあります。

幼児、児童、生徒の多様な教育的ニーズに対応して、的確な指導ができるようにするためには、各学校の校内委員会の中心となるコーディネーターを養成する必要があります。そのため、毎月のように「コーディネーター研修会」を行ったり、専門の先生を招いて講演会を実施したりして、専門的な知識を身につけ、指導力の向上を図っています。

特別支援で大切なことは、子どもが持つ可能性を見つけて伸ばすにはどのような環境で育てるのがいちばんよいかを、冷静に判断することです。その判断が保護者の希望と合わないときには、理解していただけるように、粘り強く話し合いを続けることを心がけています。

運動の楽しさをまず伝えたい

子どもたちの体力低下については、どのようにお考えですか。

新潟県は運動状況調査の成績がよく、せっぱ詰まっているという印象はまだそれほど強くは持っていません。ただ、スポーツ少年団などの組織に入ってスポーツをする子どもと、まったく運動をしない子どもの二極化が進んでいること。しかも、まったく運動しない子どもが増えてきていること。これがやはり心配です。

選手にならなくてもいいんです。まず、子どもたちに体を動かすことの楽しさを知ってもらいたい。そして、さらに高いレベルに進みたくなったら、スポーツ少年団などに入団して、選手を目指せばよい。

運動の楽しさを伝えるために、放課後、スポーツ指導員が小学校に行き、子どもたちと遊ぶなどの活動を不定期に行っています。このような取り組みを、各地域でさらに展開していきたいですね。

また、子どもから大人まで誰もが楽しめる総合型地域スポーツクラブの構想が実を結びつつあります。「わくわくたいないスポーツクラブ(仮称)」の設立に向けて、現在、準備を進めているところです。

胎内市サイト

<http://www.city.tainai.niigata.jp/>

教育ジャーナル <http://gakkokyoiku.gakken.co.jp/k-journal/>

合言葉は「がんばれ！公立校！！」

「教育ジャーナル」は、子どもたちの喜びを第一に考える教師のための雑誌です。子どもと教育にかかわるすべての方にご購読いただけます。



教育ジャーナル最新号

[コラム一覧はこちら](#)

[ページトップへ](#)

(C) Gakken E-mirail Co.Ltd